

創設期の東京帝国大学附属植物園日光分園におけるロックガーデンの整備について

The rock garden of the Nikko botanical gardens attached to Tokyo Imperial University in the foundation period

西村 公宏*

Kimihiro NISHIMURA

Abstract : The aim of this study is obtain the character of the rock garden of the Nikko botanical gardens attached to Tokyo Imperial University in the foundation period (1902-1911). Not just as the research facility of alpine plants, as the shelter, Nikko botanical gardens were founded at Hotokeiwa, near the Nikko Toshogu Shrine, in 1902 by Prof. Jinzo Matsumura. In the botanical gardens, the rock garden was gradually made. This rock garden featured some hill tastefully arranged with a cascade, running water and stones. The growth of the alpine plants in the rock garden was good. The botanical gardens were open to public from about 1906. The Nikko botanical gardens moved to Rengeishi because of small site (2,620 tsubo) and floods, but are important as a monumental birthplace of the real rock garden in the modern botanical gardens of Japan.

Keywords: *The rock garden, Tokyo Imperial University, Botanical gardens, Jinzo Matsumur, Nikko, Alpine plants*

キーワード : ロックガーデン, 東京帝国大学, 植物園, 松村任三, 日光, 高山植物

1. はじめに

ロックガーデンは、17世紀末頃のイギリスにおいて、日本や中国から渡った築山に山野草を植えたのが始まりで、19世紀後半には岩を組み上げた形に発展したとされている¹⁾。このロックガーデンは、植物園においても、高山植物を培養・展示する施設として設けられることがあり、日本においては、国立大学法人東京大学大学院理学系研究科附属植物園日光分園の前身である東京帝国大学理科大学附属植物園日光分園(以下、日光分園)の創設時のものが最も古いという説も見られる²⁾。日光分園については、明治35(1902)年11月5日、栃木県下野国上都賀郡日光町佛岩(現栃木県日光市佛岩)に創設されたが、敷地の狭隘(約2,600坪)及び稲荷川等の氾濫による被害を受けることから、明治44(1911)年11月、花石町の松平伯別邸の敷地に移転したこと、また、創設に際しては、東京帝国大学理科大学教授松村任三が、日光在住の画家五百城文哉及び山草愛好家として知られた弁護士城数馬と協議し、日光東照宮宮司中山信徴の協力を得て、東照宮が所有していた佛岩の土地を取得したこと³⁾がすでに指摘されているが、日光分園の具体的な整備内容等については明らかにされていない。

本稿では、近代日本の植物園におけるロックガーデンの成立の一端を辿るために、日光分園の創設から移転までの9年間を創設期(1902-1911)と位置付け、東京大学所蔵の資料等を用いて、松村がどのような意図により、いかなる施設整備を進めたかを、関連する施設にもふれながら明らかにしたい。

2. 日光分園の創設

(1) 高山植物苗圃地の取得

東京大学文書館所蔵の「明治二十五年度以降 全四十四年ニ至ル土地関係書類」(以下、「土地関係書類」)には、日光分園の敷地取得に関する伺いが綴られている。この内、明治35(1902)年5月16日付の「理科大学附属植物園高山植物苗圃地ニ使用ノ爲メ資金ヲ以テ日光宮附属地ト交換ノ件伺案」には、

東京市小石川区所在本學理科大学附属植物園ノ地タル平地植物ノ蒐集ニハ適合セリト雖ドモ高山等ニ産スル所謂寒帯植物ノ移植ニハ適當ナラズ故ニ各地諸山ニ於テ採集セル植物ノ如キ及近時海外諸植物園等ト種子ノ交換ニ依テ得ル所ノ高山植物ノ如キハ共ニ完全ノ發育ヲ見ル能ハザルノミナラズ遂ニ枯死セシムルニ終ルハ遺憾甚シトス 日光山ハ各種ノ植物ニ當メル本邦唯一ノ地ナリ且ツ東京ヲ距ル甚タ遠カラサルカ故ニ旅行者諸山ニ採集ヲ試ムル者近年増加スル爲メ珍奇ノ種類ハ殆ント絶滅セントスルモノアルニ至レリ是等ノ植物ヲ保護シ兼テ前述ノ植物ヲ移植セン爲メ該山ニ格好ノ土地ヲ得テ本園ニ附属セシメラルハ學術上必要ノ事タリ

とあり、当時、東京帝国大学理科大学附属植物園(以下、小石川本園)では、高山植物の培養が困難であり、また、各種植物が豊富で東京に程近い日光では、旅行者の乱獲により貴重種が絶滅の危機に瀕していたことから、小石川本園及び日光の高山植物を保護するために、日光に苗圃地を確保する必要があるとしているのである。

そして、土地を得る利益として、

(一) 高山植物ノ苗圃トシテ内地諸山ノ植物ヲ蒐集シ且ツ餘裕アルモノハ之ヲ海外該植物園等ト交換シ以テ廣ク珍奇ノ植物ヲ得ルノ重大ナル便益ヲ得ルコト (二) 斬學研究ノ滞在所及學生指導地トシテ好適ノ土地ナルコト (三) 將來内外ノ觀覽者ニ入場ヲ許可シテ収入ヲ計リ且ツ植物學上ノ智識ヲ啓發スルヲ得ルコト (四) 各地諸山ヨリ移植シタル植物ヲ繁殖セシメ其有餘ノ分ヲ海外ノ需要者ニ賣却シ以テ斬學ニ資シ併テ収益ヲ計ルヲ得ルコト等ナリ

を挙げている。高山植物の苗圃としての機能だけでなく、植物学の研究、教育施設としての機能、さらには、有料公開等による収益の確保、知識の啓発等、社会教育施設としての機能も意図していたことが明らかになる。

なお、敷地の取得については、

* 茨城県土木部

今般別紙絵圖面ノ日光宮所属地ヲ本學資金ト交換ノ義内議承致シ

とあり、売買による取得であったことが知られる。ちなみに、「本學資金」とは公債証書及び現金で、合計2,973円82銭5厘であった。

また、別紙絵圖面「東京帝国大學資金ト交換ヲ要スル下野国上都賀郡日光町大字日光字佛岩日光東照宮附属地」より、日光分園の敷地は、「下野国上都賀郡日光町大字日光字佛岩」の2323番(山林616坪)、2325番(山林908坪)、2326番(宅地178坪)、2327番イ号(山林779坪)、2327番ロ号(山林139坪)の5筆で合計2,620坪であることがわかり、これらの地番の位置を、周辺の筆も含め、宇都宮法務局日光支局所蔵の公図である「下野國都賀郡日光町全圖 明治九年改正之製圖ニ依リ謄寫ス」により確認して、それを「明治四十二年測量 日光社寺大修理事務所所蔵實測圖」⁴⁾に落としたのが図-1(斜線部分)である。敷地は、西側は東照宮と、東側は稻荷川と、そして、南側はY字路やT字路の道と接する土地であった。

(2) 敷地の状況

日光分園の敷地は、享保12(1727)年の「日光山大繪圖」等に当たると、近世においては常観坊(じょうかんぼう)等の宿坊が位置しており、庭木等も描かれているが⁵⁾、東京帝国大学の所有になった頃には、前述の明治35(1902)年5月16日付の同いに添付された「立木明細書」より、杉(279本)、桧(131本)、松(13本)他、計678本の樹木が敷地内にあったことがわかる。

また、「土地關係書類」には、日光分園敷地と輪王寺用地との境界に関する明治35(1902)年12月16日付の「契約書」の添付図面である「栃木縣上都賀郡日光町字佛岩東京帝国大學用地圖」(図-2)が綴られており⁶⁾、この図面からは、敷地を東西に分け、中央部では蛇行している流れが確認でき、中央部には法面の記載も見られることから、この部分で流れは小瀑布になっていたと考えられる。そして、敷地西側は3つに区画されており、南の区画の西側には築山の、中央の区画の西側には岩石及び池と思われる記載が見られる。

さらに、明治35(1902)年12月発行の「東洋學藝雜誌」(255号)には、松村任三による「高山植物の保護」(以下、松村(1902))が掲載されており、ここでも松村は、高山植物園創設による高山植物の保護を訴えているが、日光分園の敷地については、

東京帝国大學は夙に此に見る所ありて、新一の高山植物園を、日光鉢石なる佛岩と稱する地に設置するに至れり。規模甚だ大ならずと雖も地は便にして、……向陽の地、陰濕の地、高低自然に宜しきを得、巖石多く蘚苔滑にして、清流其の間を曲折し、或は小湖を湛ふべく、或は飛泉を懸くべし。以て植物を移

植して之を保護するの地たるに適せりと謂ふべし。又園の周圍は、繞らずに石垣を以てしたれば、一見城廓を爲せるの觀あり。此の地は本年の夏始めて東京帝国大學に屬したるものなれば、日尚淺くして、未だ何等の設備に及ばざれども、漸を逐うて計畫を實行せんと欲す。而して今秋既に採集したる日光山樹木類の爰に培養する者七十餘種に及びたり。……殊に高山の種類は、石垣の間に悉く之を植付け、園内には小徑を適宜に開鑿して之を見るに便ならしめんとす。……後來は、爰に日光山に産する種類のみならず、信州、加、越等の高山に産する花卉樹木に至るまで皆其の種類を爰に移植し、尚海外の高山植物の種類にも及ぼんとするの計畫なり。又實驗室も設けて、學生生徒及學者の研究に便ならしめんとする

と述べており⁷⁾、日光分園の敷地は、日向、日陰、高低差が適度にあり、岩石が多く、清流が蛇行し、池や小瀑布もある、高山植物の培養に相応しい土地であること、今後は、小径や實驗室を設け、日光山のみならず、信州等の高山に産する花卉樹木に至るまで、移植する計画であったことが明らかになる。

(3) ロックガーデンの整備

東京大学施設部には、「營繕掛(係)」による「東京帝国大學土地建物調」が残されており、日光分園については、平面図「明治参拾六年九月改」(図-3)、「明治四十年年度」、「明治四十二年九月」、「明治四十四年九月」が現存している。これらの図面は、敷地南側に實驗室(派出所)が設けられている点を除けば図-2とほぼ同じであり、土地の区割りや流れ等に大きな変化はなかったことがわかる。

創設当初の状況については、東京大学総合図書館所蔵の「明治三十六年度東京帝国大學年報甲款」に、

日光分園ニ関シテハ既ニ該地方諸山ニ産スル植物及ヒ信州地方ニ産スル植物ノ一部ヲモ蒐集シ又海外ノ高山植物ヲモ移植シ經營日尚淺キニ比シ大ニ見ルヘキモノニアルニ至レリ

とあり、高山植物の蒐集、移植が計画通りに進んでいたことが確認できるが、明治36(1903)年12月発行の「東京帝国大學一覽 從明治三十六年 至明治三十七年」には、

該園ノ敷地タル甚タ狭小ニシテ建物ノ如キモ亦松村理學博士ノ寄附ニ係ルー小實驗所アルニ過キス故ニ將來益々其規模ヲ擴張シテ以テ設備ノ完成ヲ圖ラントス

とあり⁸⁾、整備が進むにつれ、敷地の狭小が問題となっていたことも知られるのである。

そして、明治38(1905)年8月発行の「園藝雜誌 夏之巻」には、松村任三による「高山植物園」(以下、松村(1905))が掲載されており、

東京帝国大學理科大学附属植物園においては、明治三十五年、



図-1 日光社寺大修理事務所所蔵實測圖(斜線部分加筆)

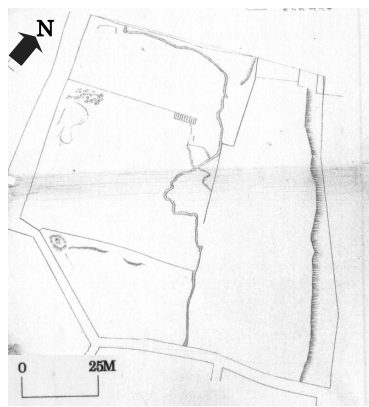


図-2 佛岩東京帝国大學用地圖(方位縮尺加筆)

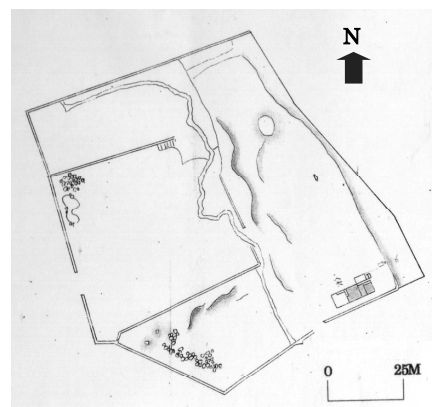


図-3 東京帝国大學土地建物調 明治参拾六年九月改(方位縮尺加筆)

日光宇佛岩といふ所に二千六百餘坪の地所を買入れて、高山植物を培養し且つこれを保護するといふやうな點より徐々とその設備に着手（とりかゝ）つて居る次第であります。……この園内に大なる石山數個を築きて、その石の間隙々に日本の高山に産する有らゆる種類を培養するの計畫であります。この高山園完成の日は今より何日といふ事は分かりませんが、これを買入れて以來着手しつゝあるので、既に一二の石山は出來たのであります、日光山に産する植物は申すに及ばず、信州奥羽等の高山に産する種類をも採集し來つて、徐々にこの園内に栽着けつゝある次第で、その今日までの結果を見るに、里においては培養し難き植物も、この園内においては土壤無くして石の上に繁茂する有様、高山植物は高山地方でなければ培養が出來ぬといふ實例はこれでも明かであると思ひます。四月中旬より八月に至る間は、この園内に断えず高山植物の花が咲きつゝ有るのを見るので、洵に愉快な事ではありますまいか。……けれども今日は未だ設備が完成の實を見るに到りませぬので、御來觀の諸君が有つても、縦覽を御許し申すといふ譯にはまみりませぬのであります。

とあることから⁹⁾、園内に石山の築造、すなわちロックガーデンの整備が進められており、植え付けた高山植物の生育状況も良好であったことが確認できるのである。

このロックガーデンについては、明治38(1905)年11月発行の「博物學雜誌」(64号)に掲載された明治38(1905)年8月撮影の「日光植物講習會員」(写真-1)¹⁰⁾及び昭和15(1940)年9月発行の『東京帝國大學理學部植物學教室沿革』(以下、『植物學教室沿革』)に掲載された明治39(1906)年8月撮影の「日光分園の一部」(写真-2)¹¹⁾より概要を知ることができる。すなわち、ロックガーデンには、樹木を背景に、石山が複數築かれており、また、それらの傍らに清流や小瀑布が確認できるが、小瀑布の位置より、石山は、敷地のほぼ中央に位置していたことがわかる。石山は、角の落ちた岩を多く用いているが、これは、東側で接する稻荷川より流れてきた石を主に用いたからではないかと考えられる。ちなみに、東京大学文書館所蔵の「文部省往復 明治三十六年」に綴られた、明治36(1903)年1月4日付の「日光町宇佛岩所在本學用地風水害石垣復舊工事ノ儀」の伺には、

河中ニ敷在セル石材ヲ蒐集シ之カ運搬人員ヲ直営トシ……費用ヲ減シ

とあることから、ロックガーデンの整備についても、あるいは関係者による直営であった可能性が指摘できよう。

また、正式な公開時期については明らかではないが、明治37(1904)年2月発行の“TOKYO IMPERIAL UNIVERSITY CALENDAR 2563-64(1903-1904)”¹²⁾には、小石川本園(“Hakusan-Gotenmachi, Koishikawa The Botanic Garden of the University”)及び日光分園(“Hotokeiwa, Nikko an Alpine Botanic Garden”)の概説が掲載されており、小石川本園についてのみ公開の記載(“The Garden is open to public visitors under certain regulations.”)が見られるが¹³⁾、明治39(1906)年3月発行の“TOKYO IMPERIAL UNIVERSITY CALENDAR 2565-66(1905-1906)”¹⁴⁾には、小石川本園と日光分園の両方の概説の後に、施設公開の記載が見られることから¹⁵⁾、明治39(1906)年頃には、日光分園も正式に公開されていたことが確認できるのである。

そして、明治42(1909)年9月発行の『日光之菜』には、日光植物園 日光橋を渡りて右折直ちに左に石壇を登りて西に進めば石垣を積みたる道の間を縫ふて至るべし此處山内宇佛岩と云ふに在り。東京帝國大學植物園の分園たり、廣さ數千坪稻荷川に臨み座ら、赤薙、女貌の名山を眺め得べく、園内には小瀑布あり、池水あり、岩石にて積み上げたる築山數個あり、日光に産するものは勿論、各地の高山より採集したる草花類を其



写真-1 日光植物講習會員 (後列右から4人目 牧野富太郎)



写真-2 日光分園の一部 (明治三十九年八月)

間に移植し自然に發生したるものゝ如くして之れを培養す、奇草珍卉數多く、其種類三千を超ゆ、四月より七八月までは花期にして觀覽者頗る多しといふ、……主任者は……望月直義氏にして親切に説明案内の勞をとらる、植物研究の爲めに日光山に入らんとするものは、必ず先づ此植物園に行き同氏に就きて産地種類行程等を尋ねば多大の便益を得べし

とあり¹⁴⁾、日光分園のロックガーデンには、小瀑布、池水、數個の石山が記され、日光及び各地の高山より採集した草花類 3,000種が、自然に發生したように培養され、花期には、多くの觀覽者で賑わっていたこと、初代主任望月直義が、來訪者に対し、高山植物等の情報提供を行っていたことが知られるのである。

3. 近代日本の植物園におけるロックガーデンの成立

創設期の日光分園のロックガーデンの整備について見てきたが、この施設は、近代日本の植物園におけるロックガーデンの成立過程で、どのような位置にあつたのであろうか。ここでは、日光分園に先行した植物園の施設整備等について見て行くこととする。

(1) 札幌農学校植物園

昭和28(1953)年発行の『宮部金吾』には、宮部金吾が明治16(1883)年に立案した「明治十六年提出 植物園設立見込書」が「明治十六年提出の植物園設計圖」(図-4)と共に掲載されている¹⁶⁾。この見込書は、札幌農学校構内樹木園を植物園として再整備するための計画書で、

岩山 羊齒類苔類高山之産、躑躅類の如きものを植え付けるに要す

とあることから、植物園内には、高山植物等を植え付ける岩山も計画されており、図-4より、岩山(E)は、園内の水草栽培用の池(D)に突き出す形で配されていたことがわかる。

この岩山、すなわちロックガーデンに関する知識を、宮部がどのようにして得たのかは明らかでないが、北海道大学附属図書館所蔵の宮部文庫の中には、ダウニングが1841年に著した“A Treatise on the Theory and Practice of Landscape Gardening Adapted to North America”の改訂版(1875)が含まれている¹⁶⁾。内扉に「開拓使圖書記」と「宮部蔵書」の印が押されたこの著作では、水辺に設けられる“alpine plants”, “ferns”(シダ類), “mosses”(コケ類)等を植付ける“Rockwork”に関する解説が図版(図-5)を交えて掲載されていることから、宮部はあるいは、このような本からロックガーデンに関する知識を得たのではないかと推察される。

ただ、明治17(1884)年7月に、札幌勸業課に属していた博物場及び附属地15,000有余坪を札幌農学校が引き継ぎ、植物園はこの附属地に整備されることになったため、札幌農学校構内における植物園整備計画は中止となっている。なお、新しい植物園の整備は、宮部を中心に進められるが、明治中、後期発行の『札幌農学校一覽』¹⁷⁾や明治35(1902)年4月発行の『増補第三版 札幌農学校』¹⁸⁾に掲載された植物園の配置図や解説に「岩山」等の記載は見られない。

(2) 帝国大学植物園

東京大学文書館所蔵の「帝國大學第三年報 起明治廿一年一月止同年十二月」には、

冬季ニ除霜ヲ了シハ播種栽培除草等ノ如キ他ノ季節ニ比スレバ
 勞力ヲ要スルヲ少ナキヲ以テ垣根、下水、道路等ノ修繕又ハ開
 墾森林ノ掃除ニ主トシテ園丁ヲ勞働セシ充テ毎トス然ルニ一昨
 臘ヨリ昨年四月ニ涉リ此勞力ヲ以テ鉢場ノ北面ニ築山ヲ構設セ
 リ此目的タル山ノ北側ニハ所謂「アルパイン」植物トマデニハ
 至ラザレドモ北海道、函根、日光等ノ山中又ハ日蔭ニ生スル植
 物ヲ栽育シ山ノ南側ニハ高燥陽地ヲ好メル植物ノ培養シ始メト
 シ春ハ早く室内ノ植物ヲ此南麓ニ出シ秋ハ晩クマダ厭寒植物ヲ
 此所ニ陽ラシ其天然ノ生育ヲ全フセシガ爲メナリ而シテ此周囲
 ニ防禦線ヲ張り柑類、荔枝、龍眼、其他ノ盆栽果物類ヲシテ來
 觀者ノ心目ヲ誘試ス諸植物ヲ此内ニ安置シ從來防禦ニ太ク苦
 ミタル來觀人ノ惡戯ヲ大ニ減スルニ至レリ……明治廿二年
 三月 帝國大學植物園管理 矢田部良吉

とあることから、明治20(1889)年12月より翌年4月にかけて、「鉢場ノ北面」に「築山」が設けられ、高山の植物等が植え込まれたことが知られるのである。

一方、小石川本園には、「帝國大學植物園一覽圖」が残されている。この図面には、園中央やや北寄りに「皇太子殿下御手栽植物」が描かれているが、大正12(1923)年3月発行の『東京帝國大學理學部附属植物園案内』(以下、『植物園案内』(1923))によると、この植栽日は明治23(1892)年11月30日である¹⁹⁾。また、園中央に温室が描かれているが、これが園北東に移築されるのは、東京大学文書館所蔵の「昭和貳年參月末日現在 國有財産調」によると、明治29(1896)年6月27日である。したがって、図面は明治20年代中、後期に描かれた図面であると考えられるが、園中央に「盆栽植物」とあり、その北側に約60坪の築山が描かれている(図-6)²⁰⁾。矢田部の報告にある築山とは、これを指していると思われるであろう。

ところで、矢田部は、築山について岩山等の表現を用いていないが、『植物園案内』(1923)には、
 山地植物栽培所アリ。是レ元、中井誠太郎ノ初メテ試ミタリシ
 山地植物栽培場ヲ取拂ヒタル後、其材料ト植物トヲ用ヒテ、大
 正二年此地ニ山草ノ岩石地栽培ヲ企テタルニ始マリ、

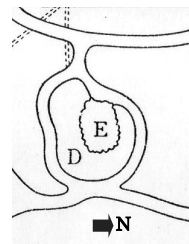


図-4 植物園設計圖
(部分 方位加筆)

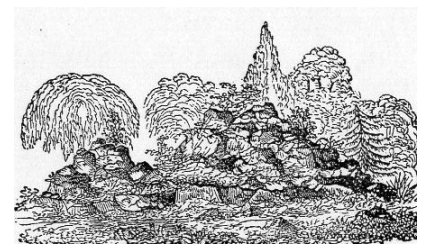


図-5 Rockwork

とあることから、築山は、岩石を材料とした、すなわち、ロックガーデンとして整備されたと考えられ、実際の整備は、中井(堀)誠太郎が担当していたことがわかる。

ちなみに、この築山が設けられた頃、松村はドイツのハイデルベルグ大学に留学中であった²¹⁾。東京大学生物学科図書室には、大正7(1918)年6月11日、松村が東京帝国大学附属図書館に寄贈した“Der Botanische Garten der Universität Heidelberg”が残されており、添付図面である“PLAN DES BOTANISCHEN GARTENS DER UNIVERSITAET – HEIDELBERG 1880”にあると、敷地北端に“Alpenpflanzen”(アルプス植物)と記された約43坪の円形の区画があり、曲線の園路も見られる(図-7)²²⁾。一方、本文には、この区画が岩を用いた斜面であることが記されており、円形の区画は、築山状のロックガーデンであることがわかる。松村はこのロックガーデンを実見し、明治21(1888)年8月に帰朝した後は、留学先のロックガーデンとよく似た築山での高山植物の培養に取り組んだと推察されるが、前述のように平地での培養は困難であったと考えられる。昭和17(1942)年8月発行の『東京帝國大學學術大觀 理學部』には、

明治24年……4月から松村任三が管理となり、温室の改築、分類花壇の擴張をしたが、……山地植物栽培用の山を廢止した。

と記されている²³⁾。

(3) 齧菜窩(五百城文哉邸)

明治25(1892)年6月、「日光東照宮陽明門」を描くために日光を訪れた画家五百城文哉は、やがて稲荷川を挟んで佛岩のほぼ対岸にあたる萩垣面に居を構え、齧菜窩と名付けた自宅に明治33(1900)年8月、皇太子が訪れたことや庭にロックガーデンが設けられていたこと等が知られている²⁴⁾。

齧菜窩については、明治37(1904)年12月発行の「園藝界」1(3)に掲載された五百城による「高山植物園の由來」に、
 城君が自分の齧菜窩を叩かれ、共に相携へて高山を跋渉すると珍らしいものは、多くなるばかりで、……或時松村博士が見物に來て、これも珍らしい、それも稀品である、あれが日光に産することを未だ聞かなんだなど、非常に驚嘆の聲發せられたが、これが嚙て動機となつて、高山植物園として大學附属の植物分園を日光山に設置さるゝ事となつたのである。

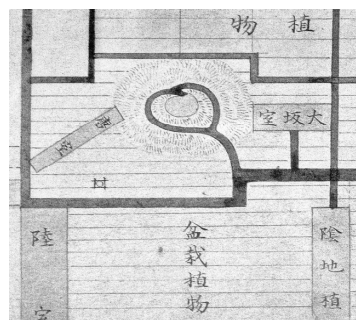


図-6 帝國大學植物園一覽圖(部分)



図-7 Alpenpflanzen

とあり、藪菜窩における高山植物の良好な生育状況が、日光分園創設の一端となったことが窺われ、また、

そうかうして居るうちに、東宮殿下が弊廬へ行啓になり、……斯様にやむごとなき方々の訪はせ玉ふにおいては、流石に枯るゝに任せもならず、幾度か参考の書籍を繙き、幾度か栽植の経験に鑑みて、山を築き、巖を据え、樹木の遮るものを除き、清泉を遠く引いて、何うやら一個の高山園を作つたところが、其効果は豫想外に著しく、長之助草九十九草、みな丈夫に發育を遂げてゐる。

ともあり、皇太子の行啓が、高山園（ロックガーデン）築造のきっかけになったことが明らかになる²⁹⁾。

そして、明治 37(1904)年 10 月発行の「園藝界」1(1)に掲載された礪川九華による「白雲日記」に、

明治三十六年……八月十五日……畫伯五百城氏の居咬藪菜窩あり。……畫伯自身出迎へられてまづ庭先へと招かる、庭は氏が苦心になりたる、高山植物培養に適したる配置にして、清泉湧くところに石を構へ、山を築き、鮮苔緑に封じて露瀝々とし、朝暉疊疊を射て紫嵐肌を浸す、閑雅いふばかりなし……氏は言ふ、庭は今年創めて構造せしところ、いまだ其十が一も完からずと、

とあり²⁹⁾、明治 36(1903)年には、本格的な高山園、すなわちロックガーデンの整備に着手したことが知られるのである。

そして、旧公図等を参考にすると、藪菜窩の敷地は 218 坪の矩形に近い土地であり²⁷⁾、五百城家所蔵（水戸市立博物館管理）の藪菜窩の庭の写真（写真-3）及び志村寛（烏嶺）が明治 42(1909)年に著した『高山植物採集及培養法』に掲載された「高山園」（藪菜窩のロックガーデン）（写真-4）²⁸⁾も併せて検討すると、庭には角の取れた岩石を積み上げた山等を確認することができ、一部、日光分園のロックガーデンとの類似が指摘できよう。

なお、五百城が参考にした書籍が何であるかは明らかではないが、明治 38(1905)年 3 月発行の「園藝界」2(3)には、五百城と親交のあった子爵青木信光による「忙中閑話」が掲載されており、高山植物の培養に就ては、種々實驗の結果、コレフオン氏の著書（Correvon, H., Liste des grains récoltées Par le jardin alpin d'acclimatation de Genève. Genève 1895.）などを参考して山を築き、それに植うる方が最も安全であるところから、皆高山園を設くるに至つたのは誠に結構のことである。

と記されている²⁹⁾。コレフオンの種子目録については、東京帝国大学理科大学教授三好学が、明治 28(1895)年 9 月発行の「植物學雜誌」において、スイスのゼネバ市にあるコレフオンの高山植物試植園と共に紹介していることから³⁰⁾、当時の関係者の間でもある程度知られていたのではないかと考えられる。また、小石川本園には、「東京帝國大學附属圖書館 97210 明治廿六年六月十六日」の印の押されたロビンソン(W. Robinson)著「The English flower garden and home grounds」(1901)が残されており、ロックガーデンの築造についても一部図版を交えて述べられている（図-8）³¹⁾。松村とも親交があった五百城は、このような造園書も参考にしたのではないかと推察されるのである³²⁾。

(4)ベルリン植物園等

すでにふれた松村の日光分園に関する論説、すなわち松村(1902)と松村(1905)を比べると、ロックガーデンのイメージとして、前者は岩石、清流及び小瀑布を、後者は数個の大きな石山をあげているが、松村はどのようにしてこれらのイメージをつかんだのであろうか。ここで、三好学が明治 28(1895)年に著した『歐洲植物學概論之進歩』に注目すると、東京大学理学部生物学図書所蔵のものには、表紙に「謹呈 松村教授 著者」とあり、松村も手にしたことが知られる。三好はこの著作において、

獨國ニテハベルリン大學植物園ヲ除クノ他ハ、大抵區域狹隘ナ

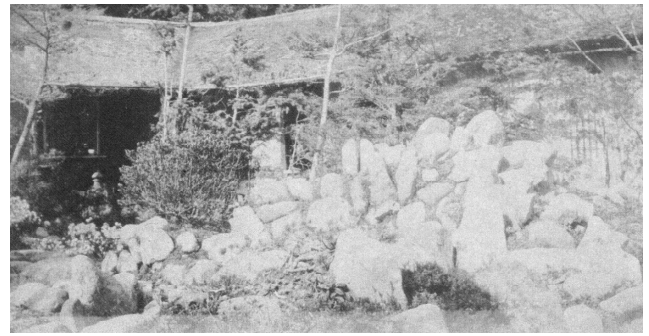


写真-3 藪菜窩の庭



写真-4 高山園

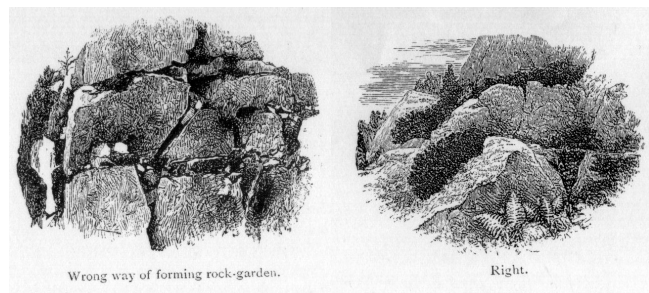


図-8 Rock Garden (左:悪い例 右:良い例)

ルヲ以テ、植物ヲ密生シ空地少シ、随テ園藝上ノ意匠及ビ風致アルモノナシ、……又何ツレノ園内ニモ多少樹園（キウ、エゼンバラ等尤モ美ナリ）、及ビ高山植物園アリ、後者ハ又花崗岩、片麻剝岩、石灰岩、「ドロミート」岩等ニ區別シ、各種ノ岩石ヲ處々ニ重疊シ、一小アルプス山系統ヲ造リ、水道管ヲ利用シテ人造瀑布ヲ懸ケ、湖水ヲ漂ヨハセ、溪流ヲ通ジ、而シテ此間ニ高山植物即チアルプス帯ノ植物ヲ栽培シ、各現地所生ノ地質ニ應シテ、花崗岩、片麻剝岩、若クハ石灰岩等ニ分植シ、以テ成ルベク自然ノ状態ニ擬ス、ベルリン植物園内ノ Alpinum ノ如キ亦頗ル見ルベキアリ、又瑞西及ビ奥國各大學植物園ニシテアルプス山ニ接近スルノ處ニテハ此類植物ノ培養セラルモノ尤モ多シ、

と述べている³³⁾。「高山植物」という語は、明治 32(1899)年 11 月 25 日、札幌博物学会において、宮部金吾が用いたのが初出という指摘も見られるが³⁴⁾、それより 4 年前に高山植物という語を用い、さらには、ベルリン植物園等における「高山植物園」（ロックガーデン）の構造について、具体的に解説していることは注目されよう。そして、「岩石ヲ處々ニ重疊シ、一小アルプス山系統ヲ造リ、」 「瀑布ヲ懸ケ、湖水ヲ漂ヨハセ、溪流ヲ通ジ、」という表現は、松村(1902)におけるそれらと類似しており、松村は三宅の著作からも影響を受けたのではないかと推察されるのである。

また、東京帝国大学農科大学助教授白井光太郎は、明治36(1903)年に著した『植物博物館及植物園の話』において、ドイツのダーレムに整備中の新ベルリン植物園を紹介しており、

最も力を用ひたるは植物地理表出の假山にして高さは二三丈に及び……落成の上は一大偉観を呈すべきと記していることから³⁵⁾、松村(1905)における「大なる石山數個」という表現は、あるいは、白井の著作の影響を受けているのではないかと推察されるのである。ちなみに、新ベルリン植物園の假山は、明治42(1909)年発行の“Der Königliche Botanische Garten und das Königliche Botanische Museum zu Dahlem”において確認することができる(写真-5)³⁶⁾。日光とダーレム、規模に隔たりはあるもののほぼ同時期に、それぞれの地に石山が築かれたのである。

4. おわりに

本稿では、東京帝国大学理科大学附属植物園日光分園について、東照宮と稲荷川に挟まれた2,620坪(2,973円)の敷地に、高山植物の研究・教育、さらには保護も目的として、松村任三の主導により創設されたこと、園内には、数個の石山、清流及び小瀑布よりなるロックガーデンが毎年徐々に整備され、明治39(1906)年頃には公開されたこと、ロックガーデンには高山の草花類3,000種が自然に発生したように培養され、多くの観覧者で賑わったこと等を指摘した。また、札幌農学校植物園の岩山は計画段階で中止となり、東京帝国大学理科大学附属植物園の築山においても高山植物の培養が困難であり、近代日本の植物園における本格的なロックガーデンは、日光分園において初めて実現したこと、その整備にあたっては、齧菜窩やベルリン植物園等の影響も窺えることを併せて指摘した。

日光分園の跡地には、石山や小瀑布の一部が今尚残っている。これらは、近代日本の植物園におけるロックガーデンの成立を記念する貴重な遺構であり、近代日本の造園遺産としての保存及び活用が望まれよう。

謝辞:本研究を進めるに当たり、下記の機関等の方々より、多大なご支援を賜りました。ここに感謝の意を表します。東京大学(附属植物園、同日光分園、附属図書館、文書館)、北海道大学附属図書館、水戸市立博物館、大町山岳博物館、日光東照宮、五百城家、須藤家、東京山草会、Bibliothèque interuniversitaire. Section Sciences.Montpellier

補注及び文献

- 1) 岡崎文彬他(1974): 造園事典: 養賢堂,167
- 2) 久保田秀夫(1969): 東大植物園日光分園: 遺伝23(11),70-74
- 3) 日光市史編さん委員会(1979): 日光市史 下巻: 日光市,340-356
寺門寿明(2004): 五百城文哉の生涯と「高山植物写生図」: 見嶺の百花譜-五百城文哉の植物画: 水戸市立博物館,12-22
- 4) 山下重民(1912): 日光大観: 東陽堂, 添付図
- 5) 中屋善兵衛(1727): 日光山大繪圖: 国立国会図書館(白井文庫)所蔵
- 6) この「契約書」は、日光分園の敷地実測の結果、日光分園の北側に接する輪王寺用地の石垣の一部が日光分園の用地に入り込んでいることが明らかになったので、輪王寺が石垣修繕の際に、実測図に基づき施工する旨を記したものである。
- 7) 松村任三(1902): 高山植物の保護: 東洋學藝雑誌 (255) ,557-560
- 8) 東京帝國大學(1903): 東京帝國大學一覽 從明治三十六年 至明治三十七年: 同學, 299
- 9) 松村任三(1905): 高山植物園: 園藝雜誌 夏之巻,23-28
- 10) 日光植物園講習會(1905): 博物學雜誌 (64) ,3-31
- 11) 東京帝國大學理學部植物學教室(1940): 東京帝國大學理學部植物學教室沿革: 三秀舎,162
- 12) TOKYO IMPERIAL UNIVERSITY (1904): TOKYO IMPERIAL UNIVERSITY CALENDAR 2563-64(1903-1904), 182-183
- 13) TOKYO IMPERIAL UNIVERSITY (1906): TOKYO IMPERIAL



写真-5 Wasserfall in den Nordalpen

UNIVERSITY CALENDAR 2565-66(1905-1906),180-181

- 14) 牧駿次(1909): 日光之榮: 三生舎,75-76 添付されている「明治四十二年六月調日光町略圖」には、東照宮と稲荷川の間「日光植物園」という表記が見られる。
- 15) 宮部金吾博士記念出版刊行會(1953): 宮部金吾: 岩波書店,145-156
- 16) A.J.DOWNING,H.W.SARGENT(1875):LANDSCAPE GARDENING AND RURALARCHITECTURE:ORANGE JUDD COMPANY,399-403
- 17) 札幌農学校(1890-1907): 札幌農学校一覽, 同校, 添付図等
- 18) 札幌農学校學藝會(1902): 増補第三版 札幌農学校, 藁華房, 添付図等
- 19) 東京帝國大學(1923): 東京帝國大學理學部附属植物園案内, 同學, 18
- 20) 規模は、原図のスケールアップによる。
- 21) 長久保片雲(1997): 世界的植物学者 松村任三の生涯, 硯印書館,221-222
- 22) Ernst Pfitzer(1880): Der Botanische Garten der Universität Heidelberg: ein Führer für dessen Besucher,Plan 規模は、原図のスケールアップによる。
- 23) 東京帝國大學(1942): 東京帝國大學學術大觀 理學部: 國際出版印刷社, 258
- 24) 小松みち(2004): 五百城文哉と牧野富太郎の交友-牧野文庫所蔵資料から見る- 見嶺の百花譜-五百城文哉の植物画: 水戸市立博物館,28-34
清水長明(1999): 山草会の遠いあしおと: やまぐさ 50号,3-10
- 25) 五百城文哉氏談(1904): 高山植物園の由来: 園藝界 1(3),18-20
- 26) 磯川九華(1904): 白雲日記: 園藝界 1(1),76-83
- 27) 旧公図及び閉鎖簿本による。
- 28) 志村寛(1909): 高山植物採集及培養法: 成美堂,口絵 なお、口絵の「高山園」については、特に説明等は見られないが、大町山岳博物館所蔵の「志村烏嶺内筆メモノート」には、「茨城師範在任中同地出身の画家五百城文哉氏より日光産ムシトリスミレの一種コウシン草の採葉標本の寄贈を受け始めて同氏が高山植物の栽培家だといふ事を知り生前二回死後一回日光同氏方を訪問した事があります拙著高山植物採集及培養法の口絵にあるロックガーデンの写真は同氏の高山園を撮影した者であります」と記されており、齧菜窩のロックガーデンであることが知られる。
- 29) 子爵 青木信光談(1905): 忙中閑話: 園藝界 2(3),17-20
本文では、青木蘭をめぐる五百城との親交についてもふれている。
- 30) 三好學(1895): コレブオン氏の高山植物試植園: 植物學雜誌 (103) ,348-349
なお、コレブオンの種子目録は、国内の図書館では確認できなかったもので、Bibliothèque interuniversitaire. Section Sciences.Montpellier (France) 所蔵のものを参考にした。
- 31) W. Robinson(1901): The English flower garden and home grounds: London. J. Murray, 892
- 32) 明治39(1906)年9月発行の「園藝之友臨時増刊 高山植物」には、城による「高山植物に関する雑感」が掲載されており、「廿九年第二の友を得た。……日光の畫伯五百城文哉君で……同郷出身なる理學博士松村任三氏に草の名を質しなどして、余から見れば師とすべき程の知識を持って居られた」とあることから、五百城と松村は、以前より親交があったことが窺える。
城棲碧(数馬)(1906): 高山植物に関する雑感: 園藝之友臨時増刊 高山植物,6
- 33) 三好學(1895): 歐洲植物學概論之進歩: 敬業社, 34-52
- 34) 武田久吉(1963): 原色日本高山植物図鑑 増補改訂: 保育社, 94-96
- 35) 白井光太郎(1903): 植物博物館及植物園の話: 丸善, 48-49
- 36) Prussia (Germany). Ministerium der Geistlichen, Unterrichts-und Medizinal-Angelegenheiten(1909): Der Königliche botanische Garten und das Königliche botanische Museum zu Dahlem: Berlin: Horn & Raasch,39